



THE HIROSAKI UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

弘前大学附属図書館報 No.32 2010.11

目次	
巻頭言 開かれた図書館 学術講演会	1
特集 第6回『言語力』大賞コンテスト	3
本との出会いを楽しむ <第6回>	6
図書館に関する話題 <第6回>	7
Library News	8
本学教員等著作寄贈図書・資料一覧	12

開かれた図書館 学術講演会

理事・副学長（社会連携・情報担当） 大河原 隆



私は、本年2月から弘前大学の社会連携・情報担当理事として附属図書館の運営に携わっています。

この間短い間ではありますが、21年度において第一期中期計画をほぼその計画どおりに終え、本年度からは引き続き『地域における高等教育機関附属図書館の中核的機関として学術情報の収集発信を推進する』という第二期中期計画のテーマに沿って諸計画を実施することとしています。三年目になる文系図書整備5ヶ年計画推進、電子ジャーナル、学術情報リポジトリ等の電子図書館整備、先頃表彰を終えましたが、第6回弘前大学学生『言語力』大賞コンテストの実施や学術講演会等の主催事業もその内容の充実に努めながらも積極的に実施しています。

さて、本年度の主催事業である第7回学術講演

会は私にとっても印象に残るものになりました。

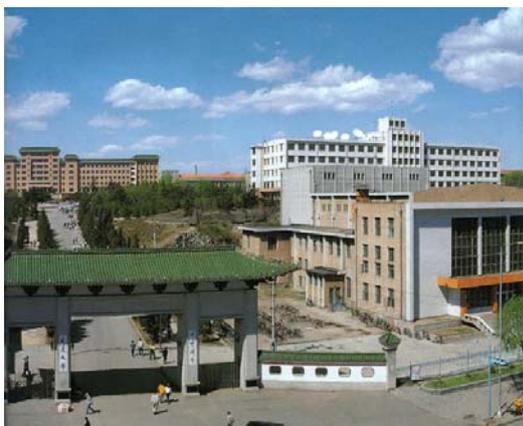
10月16日、50周年記念会館のみちのくホールに於いて開催されましたが、演題は『弘前第八師団と日露戦争』（坂の上の雲の時代）と題して、明治大学文学部教授の山田朗氏を講師に迎えて行われました。当日はホールがほぼ満席約250名の市民や学生が熱心に聴き入っていました。もとより司馬遼太郎は国民的な作家で坂の上の雲はその代表作である上にテレビ放映もされるとあって、日頃あまり入り易いとは言えない大学へ市民も足を運んだことと思いますが、ここは開かれた図書館を標榜し、テーマの選定や広報の改善など努力の成果が現れて来たものと思われまます。平成20年度「江戸城大奥と天璋院篤姫」21年度は太宰治生誕100年事業として「太宰治・友情・愛・青春」等いずれもみちのくホールを満席にし、マスコミにも大きくとりあげられています。館長を先頭に魅力ある図書館事業に取り組む職員の企画

力によるものと思います。

講演では、第八師団の極寒の中での活躍について触れつつも、犠牲者の多い厳しい戦いであったとも話され聴衆の皆さんも胸を打たれたものと思います。私はと言えば、小学生の頃、祖母から乃木大将とステッセル將軍の会見、軍神広瀬武夫について等、日露戦争のはなしを聞いて育ったので大いに興味のあるところではありましたが、むしろ戦費調達に苦勞した日本と情報戦略で国債発行を助けた英国のことなど新たにその裏面史に学ぶ処も多くありました。

また第八師団のことになると私の父もまた母方の祖父も弘前第八師団に勤務をしています。いずれも山形県の出身で結局は弘前の住人となり今の私が存在しています。父は満州の黒河まで野戦建築隊として従軍しています。

私は8年前にロシアのハバロフスクからアムール河を渡ってハルピンまで中国東北地方の満州を旅行しましたが、今年の夏は本学と姉妹校となっている延辺大学の延吉市から中国東北部の旅をし



本学姉妹校の延辺大学（吉林省延吉市）

て来ました。日露戦争から日中戦争の舞台となった旧満州を旅するという長年の夢をかなえた年でもありました。

明治維新で廃藩置県となって、弘前藩都の弘前市は衰微します。それを救ったのが第八師団の設置であり、弘前藩の弘前市は軍都として賑わうことになりました。そして太平洋戦争が終結して弘前は戦災を受けなかったことから、今度は軍の施設も活用して学都として復活しました。

弘前大学は、本部、人文、教育学部などが元官立弘前高校敷地内に、そして理工、農学生命科学部はこれに接続する元第八師団司令部の跡地にあります。このように弘前大学は弘前市の歴史を象徴しております。

そして陸羯南^{くがかつなん}の名山詩の如く、天下の賢たる人材の育成に努めながら、なお一層、教育・研究・社会貢献を通し、地域の経済・産業・教育・文化などの活性化に寄与するための努力を継続しているところでもあります。

（おおかわら たかし）



第八師団司令部（現農学生命科学部門付近）
県史編集グループ所蔵

特集 第6回『言語力』大賞コンテスト

今年で6回目を迎えた本コンテスト。

昨年度は第5回までの受賞作をまとめた作品集『幻灯夢』が、弘前大学出版会から刊行されました。今年も応募作品の中から下記の優秀作品が選ばれました。

第6回弘前大学学生『言語力』大賞コンテスト 受賞者一覧

I：文学作品部門（ジャンルは自由）		*応募総数20点	
大賞	人文学部2年	山内 梢	「光の汀」
優秀賞	医学部保健学科3年	梅田 大峰	「エモーショナル・エモーション」
〃	人文学部1年	石川 里穂	「John Smith & Company!!」
佳作	人文学部3年	榎谷 智美	「伝言板ネットワーク」
〃	人文学部1年	葛西 鈴香	「悪夢の果てに」
II：評論部門（テーマ「21世紀における地域の発展に向けて」）		*応募総数1点	
佳作	教育学部3年	佐藤 雄哉	「ケータイと生きる」

★受賞作品公開★<http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/guidetop/gengoryoku/index.html>

大賞受賞者の声

挑戦の場

第6回言語力大賞 大賞受賞 人文学部2年 山内 梢



私は昔から色々なことを空想して遊ぶことが好きでした。自分ではない別の誰かが、別の世界で冒険を繰り広げる——そんな空想を、目に見える形で現実に留めておきたい。そう思った時、私が選んだのは「小説」という方法でした。ひとりでこつこつと書いては消し、書いては投げ出しを繰り返していたものが、次第に友達に見せるようになり、「読まれる」ことを意識して書くようになりました。そして、もっと自分の書いた物語を色々な人に読んでもらいたい、感想を聞きたいと思うようになったのです。そんな折、私は『言語力』大賞コンテストを知りました。長編を書くには力量が足りず、他の文学賞に応募する勇気もなく……という私でしたが、大学内のコンテストで、

しかも4000字程度の短編ならば、自分でも書けるかもしれない、力量を試せるかもしれない——により、自分の物語に対して客観的な意見を聞くことができるとあらば、応募しない理由はありませんでした。

飽き性な私でも、短編ならばきちんと書き切れるだろう。初めはそう思っていました。しかし、いざ書き始めてみると、短編小説だからこそその制約が立ちはだかり、執筆はなかなかかどりませんでした。まず、短い枚数の中で物語を完結させなければならないため、込み入った設定や展開はできません。また、登場人物が多いと、短い枚数では書き分けが難しく、一人一人が薄っぺらい印象になってしまいますから、登場人物を一人や二

人、多くても三人か四人に限定しなくてはなりません。文章も、短編だからこそその読みやすさを前提としたものでなければならぬ——など、短編の難しさを痛感しました。そして悪戦苦闘の結果、完成したのが、受賞作「光の汀」です。この作品では、四季というサイクルで物語を区切り、登場人物を二人に限定。また、文章も長々と書き連ねるのではなく、なるべく一文を短く、「簡潔な表現で鮮やかな印象」を心掛けました。作品の舞台、恐山・宇曽利湖の雰囲気や情景が上手く伝わっていただければ嬉しいです。

書き上げてみてわかりましたが、短いから書き

やすい、ではなく、むしろ短いからこそ難しいのではないかと思います。それが「言語力」大賞の難しさではないか、とも。裏を返せば、難しいからこそ自分の実力が素直にわかる、ということではありますが、より幅広い学部、学生から作品を募るのであれば、「〇〇字程度」や「〇枚まで」ではなく、「〇枚以上」など下限だけ設定し、上限は設けない方針も検討するべきではないでしょうか。

私にとって「言語力」大賞は挑戦の場でした。今後も、多くの弘大生にとって「言語力」大賞がなにかひとつの目標となるような、そんなコンテストで在り続けることを願っています。

(やまうち こそえ)

審査委員から

「言語力大賞コンテスト」考

第6回言語力大賞審査委員 理工学部准教授 小西 榮一

本学の図書館主催の「言語力コンテスト」(第6回)の今年度の審査委員の末席に連なった。10月半ば過ぎに審査を終え、無事に「お役御免」と心づもりしていたら、さらに作文を義務付けられた。「言語力コンテスト」の将来に何かお役に立てればと思い、拙文をお届けする。

簡条書きとする。(1)文学作品部門の水準は高いと思う。入選作は構成もしっかりしているし、文章も悪くない。また応募数もそれなりにある。しかし(2)文学作品部門以外の関心は極めて低い。応募数も極めて少ない。また文学作品部門の応募

者の学部も人文系がほとんどであり、理工系はまれである。さらに(3)審査員の問題。審査員は毎年入れ替わりが多い。私のように、常日ごろ減点法でレポート採点をしている者にとっては、標準以上の作品の優劣を見極めるのは困難であったと思う。「審査力」のある常任の審査員を若干人置いてはどうだろうか。

審査員の構成はともかく、やはり、多くの学生が参加する斬新な企画が必要であろう。それには企画の段階で学生にアイデアを募集してみたいかがであろう。暴論であろうか？

(こにし えいいち)

「言語力」大賞コンテストの審査を終えて

第6回言語力大賞審査委員 農学生命科学部准教授 石田 清



言語力大賞コンテストへの応募作は、文学作品部門で20件、評論部門で1件ありましたが、私が惹かれた作品は4作ありました。そのうちのひとつが大賞受賞作「光の汀」です。今夏霊場恐山を歩く機会があったのですが、この作品を読んであの霊場の幻想的な雰囲気が脳裏に蘇ってきました。

私には、作中の「私」と「若い男の人」は脇役で、霊場そのものが主人公であるかのように感じられた作品です。

ところで、私はここ十数年、純文学と言われるような作品を読んでいません。余暇の楽しみとして読書することはありますが、そういう時に読む

のはエッセイやノンフィクションばかりです。「事実は小説よりも奇なり」と考える私のような人間が文学作品の審査に加わるのは如何なものかと思うこともありました。審査の視点の「多様性」を高めることにも意味があると思ひ直し、審査を引き受けた次第です。それにしても、言語力大賞コンテストの文学作品部門は、ジャンルは自由な

のに、応募作は小説ばかりで随想や紀行文、ノンフィクションがなかったことが気になります。評論部門の応募作が1件しかなかったことも、根は同じかもしれません。弘大生の「言語力」を高めていくためには、こうした様々なジャンルの応募作品を増やす工夫が必要かもしれません。

(いしだ きよし)

第6回「言語力」大賞コンテスト 審査員をつとめて

第6回言語力大賞審査委員 医学研究科准教授 相澤 寛



今回初めて審査員をつとめました。文学の素養のない私なりに、筋や人物像の一貫性とまとまり、または、文が荒削りでも内容展開に惹かれるものがあるか、に重心を置き、美文や読者の感情移入に期待依存していると感じさせる詠嘆調のものには距離をおきました。文学作品部門は上位候補選考に悩まされ、ゼロからの創作でこれほどのものがと感心しました。授賞式後お話を聞き、日頃から仲間うちでの創作、批評に慣れ、一定の方向性で文を綴って過ごしている学生さんがいらっしやるのだと認識しました。一方で、評論部門への応募が少ないことは大変残念です。ゼミやレポートで論述に疲れているのか、巷にあふれる

新聞雑誌の社説、ネット上の議論、つぶやきを前に遠慮してか、大学という社会の中で自分の名前でも評論を出すことに躊躇してのことか、考えさせられました。文学作品部門は活発でしたが、書き手ないし登場人物が社会・集団にあって生活していく中で何かを感じて考え、整理し、伝える場面は少なかったと思います。他の世代や立場とは異なる、学生さんならではの視点、主張が出てきやすそうなテーマを加えとか、各学部で評論部門のテーマに関連する内容を扱うゼミや講義に協力をお願いして学生に評論を書かせ、選抜した作品を応募作品として審査するなどの、評論部門でのこ入れの工夫と今後の発展に期待しています。

(あいざわ ひろし)

受賞作の衆目の評価を、 そして若き文芸者の登竜門に

第6回言語力大賞審査委員 保健学研究科准教授 大友 良光



芸術であれ、技術であれ、一度プロの評価を得た作品の創造者は時代の寵児となり、その人生が一変し、その作品に触れる者の生活に強いインパクトを与えます。

『言語力』大賞コンテストは今年6回目を迎え11月5日に受賞式が行われました。受賞者の喜びはいかばかりかと思われます。しかし、渾身の力作が多くの学生に読まれる機会はどれほどあるのでしょうか、残念ながら知る由もありません。このことは審査員にとっても重大な問題となりま

す。選ばれた作品が多数の読者に支持されることは審査員に対する評価でもあるからです。したがって、受賞作品が多くの読者の目に留る工夫が急務と思います。最近になって漸く、第5回までの作品群が弘前大学出版会から出版されるようになり、一步前進したと思われます。しかし、公表の迅速性には欠けております。

受賞作を号外などで学内外に紙媒体で提供することも一考ではないでしょうか。受賞作が紙媒体で直ちに学内や書店等に並ぶことになれば、受賞

者にとっては褒賞品にも勝る名誉になるだけでなく、衆目の評価は選者の力量も問うことにもなり、本コンテストの継続的発展に繋がるものと思われま

願わくは、太宰治を輩出した弘前大学の本コンテストが全国の大学生等に周知され、時代を先導する若き文芸者の登竜門になることを望みたいと思います。

(おおとも よしみつ)

本との出会いを楽しむ 第6回

美とファンタジーの世界へ

保健学研究科教授 西澤 一治



原稿を依頼されて改めて自分の書棚を眺めると、医学の専門書よりも美術と音楽関連の本が多いのに気づきました。購入してまだ読み終えていない本も数多くあります。この中でご紹介するとすれば、エウヘーニオ・ドールス著「プラド美術館の三時間 Tres Horas En El Museo Del Prado」(神吉敬三訳、美術出版社 1973) でしょう。この初版本は上質な布地装丁で、外装は原著の第 10



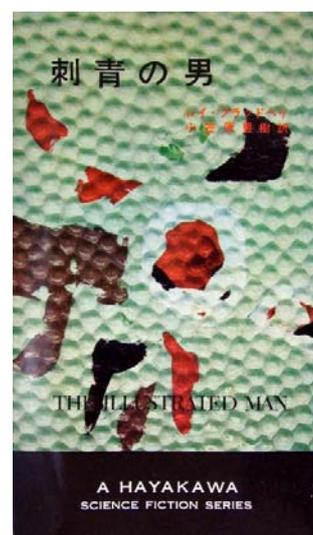
版(1971)を忠実に模したものと思われます。これは決してプラドのガイドブック的な本ではなく、いわば美術評論に属します。エル・グレコ、ゴヤ、ベラスケスに多くの頁を割いていますが、この本

を味わいますと、いつかはプラドを訪れたいと願わずには居られない気持ちになります。

残念ながら本書は絶版で、97年に筑摩書房から新装版で発行されているのですが、これも絶版になっているようです。

子供の頃、生家の2軒隣に「暖鳥」の小さな看板が掲げられた貸本屋がありました。高校の教師をされていたご主人は有名なアララギ派の歌人でした。店を切り盛りなさっていた奥様が、今思えば相当な知識人で、本好きの私に「これを読んでご覧なさい」、「今度はこれを」と、色々なジャン

ルの本を薦めてくれました。ここで出会ってファンになったのがペーパーバックの早川ミステリとSFであります。クリスティ、ドイル、クイーンなどの推理小説、アシモフ、ハインラインなどのSFは有名な作品は学生時代に殆ど読みました。チャンドラーなどのハードボイルドにも夢中になりました。特にSFの魅力に惹かれて知った作家が、「華氏451度 Fahrenheit 451」で知られるレイ・ブラッドベリ Ray Bradbury であります。彼はその後SFから離れてファンタジーに軸を移しますが、「火星年代記 The Martian Chronicles」のような抒情詩的な名作は、年代を超えて輝き続けるSFの金字塔と思います。ブラッドベリは多くの短編集を上梓して、私は2作目の「刺青の男 The Illustrated Man」が大好きです。特にこの中の「万華鏡 Kaleidoscope」や「今夜限り世界が The Last Night of the World」は、読んだ後に何か心に深くしみ入って忘れられないものがあります。冬の夜にグラスを片手にお読みになっては如何でしょうか。



(にしざわ かずはる)

図書館に関する話題 第6回 文系図書購入

文系図書の紹介 「フロイト全集」について

教育学部准教授 田上 恭子



皆さんご存知かと思いますが、フロイトは無意識の発見、精神分析の創始者として広く知られています。フロイトの理論や臨床については、医学、心理学、哲学など非常に幅広い分野で論じられていますし、精神分析「学」とも言われるように、幅広い分野と関わりのあるひとつの学問体系であると思います。特に無意識や自我や防衛機制といった「心」に関する理論は、誰もが一度は耳にしたり触れたりしたことがあるのではないのでしょうか。また心理的な治療・援助としての精神分析は、現在の心理療法の源のひとつであると位置づけられてもいます。わが国のカウンセリングや心理療法の基本原則とされているものの中には、フロイトの理論と臨床に基づくものも少なからずあると考えられます。

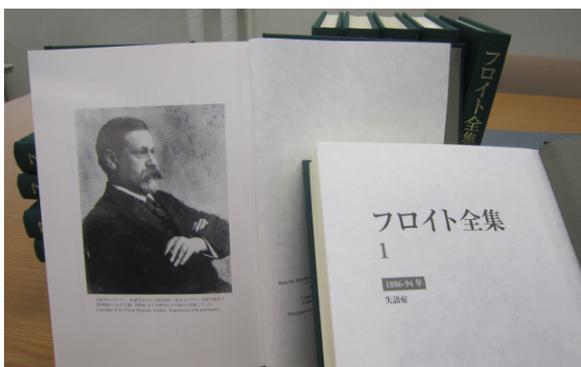
しかしながら、フロイトの理論、精神分析は多方面から批判されているのも事実です。実証が困難・不可能である彼の理論は科学的ではないという考えは、科学論などでひきあいに出されることが多いようですし、心理学の基礎的なテキストでもよく批判的に紹介されています。さらに、わが国においても、カウンセリングや心理療法などの心の治療・援助においてエビデンスが求められ、またできるだけ短期的成果が求められる昨今、長期的でエビデンス・ベーストではない精神分析的な

アプローチを、役に立たない、意味のないものと捉えるのはある意味もったいなことなのかもしれません。

私自身は心理学が専門で、臨床心理学は専門のひとつではありますが、精神分析の専門家ではありませんし、フロイトの著作についてもそれほど目を通していません。ただ最近思うのは、よく知っているわけではないのに単に批判で終わってしまうのはもったいなあということです。自身の感覚でフロイトの考え・思い、人となりを受けとめてみることで、そしてそれを通して自身のあり方や専門性を問い直してみることは、決して無駄ではないと思います。

これまでフロイトの数々の著作は翻訳されていましたが、このたび新たな翻訳が施され、また初めて紹介される多くの論考も含まれている「フロイト全集」が出版され始めたのを機に、本学にも附属図書館文系図書予算によって整備していただくことになりました。臨床心理学等を専門とする方のみならず、人々に関わることに関心があったり、「心」というものに関心を持っていたりする方は、是非一度手にとられてみてはいかがでしょうか。「フロイトを学ぶ」ことではもちろんですが、「フロイトを通して学ぶ」ことで、新たな発見・気づきが必ずあると思います。

(たがみ きょうこ)



田上先生にご紹介いただいた「フロイト全集」は、本館で所蔵しています。

所在:本館新書庫2層開架
請求記号:146.13/F46/1 他

-加藤謙一顕彰事業について-

夏休みが明けてキャンパスへ帰って来た学生の皆さんは、附属図書館の玄関右手の「なかよし」と書かれた記念碑に気づいたことと思います。猛暑も一段落した9月7日、附属図書館が中心となり、故加藤謙一氏の記念文庫の開設、完成した記念碑の除幕式、資料展など顕彰事業を学内外の関係者、同氏のご遺族の出席をいただき行いました。加藤氏は、本学の前身の青森県師範学校の卒業生で戦前から戦後にかけて「少年倶楽部」「野球少年」「漫画少年」など少年雑誌の編集に一生を捧げ、手塚治虫、寺田ヒロオ、藤子不二夫、石ノ森章太郎、松本零士など戦後を代表する名だたる漫画家を育て、今日の漫画文化の礎を築き名編集長と謳われた人物です。

雑誌の編集者は、本作りの裏方であり、ご存知ない方も多いため、まず、同氏の業績を簡単に紹介します。

加藤謙一氏は、1896年（明治29）弘前市に生まれました。青森県立弘前中学校（現県立弘前高等学校）を経て1916年（大正5）青森県師範学校（現弘前大学教育学部）に入学。1917年（大正6）に同校を卒業し、市内の富田尋常小学校（現弘前市立大成小学校）に奉職しました。在職中に作った学級誌「なかよし」を生徒たちが喜びのを見て「この喜びを全国の子どもたちに広めたい」との思いが強まり、職を辞して上京。1921年（大正10）に講談社に入社、入社後わずか3か月で『少年倶楽部』の編集長に抜擢され、次々と新機軸を出して『少年倶楽部』の発行部数を伸ばしました。新聞小説の雄で弘前出身の佐藤紅緑に依頼し、「あゝ玉杯に花うけて」「少年讃歌」など7編の大作を世に出しました。また、吉川英治、大佛次郎などの小説や田河水泡の漫画「のらくろ」など各方面の作家を動員し「少年倶楽部」を45万部発行の人気雑誌に発展させました。今では一般的な雑誌の付録も同氏が読者の心をつかむために考え出したアイデアです。

1945年（昭和20）、講談社取締役役に就任しましたが、太平洋戦争の終結に伴い退社。1948年（昭和23）、自ら学童社を興し、雑誌『漫画少年』を創刊しました。同誌において、新人の発掘と育成に力を入れ、前述の日本を代表する多くの漫画家たちを世に送り出しました。これら漫画家達のエピソードは、「トキワ荘青春日記」（寺田ヒロオ著）、「トキワ荘の青春」（石ノ森章太郎著）をご覧ください。

『漫画少年』の終刊後、講談社に顧問として復帰し、1975年（昭和50）、病気のため79歳で亡くなりました。

続いて主な行事のあらましについて記述します。

「加藤謙一文庫」開設式

「加藤謙一文庫」は、ご子息の加藤丈夫氏からご寄贈いただいた蔵書を基に、附属図書館で収集した今では貴重本となり古書店でも入手が困難な「少年倶楽部」「野球少年」「漫画少年」の原本又は復刻版、



附属図書館2階加藤謙一文庫

手塚治虫、寺田ヒロオ、石ノ森章太郎など彼が育てた著名な漫画家の関連資料、及び2009年に特別展「加藤謙一伝」を開催した「文京ふるさと歴史館」の学芸員加藤元信氏からご寄贈いただいた「野球少年」「漫画少年」の原本6冊などからなり、附属図書館2階に開設しました。

9月7日の開設式では、遠藤学長が加藤氏の偉業を紹介したあと、遠藤学長、加藤丈夫氏（加藤謙一氏の四男）、長谷川附属図書館長によるテープカットが行われ、蔵書と資料を寄贈された加藤丈夫氏へ遠藤学長から感謝状が贈呈されました。

文庫に配架した「少年倶楽部」「野球少年」「漫画少年」は、1920年代から1950年代にかけての少年雑誌の変遷を俯瞰する上でも貴重な資料です。また、前述の著名な漫画家のデビュー当時の作品を手にとって見ることができ、タイムスリップして彼らの将来を予感させるエスプリを感じます。



附属図書館玄関にある記念碑

記念碑除幕式

文庫の開設の後、附属図書館玄関において完成した記念碑の除幕式が行われました。

遠藤学長、加藤丈夫氏による記念碑除幕に続いて長谷川附属図書館長から記念碑建立に至る経緯、碑文についての紹介、遠藤学長、渡辺財務・施設担当理事、長谷川附属図書館長、加藤家ご親族による記念植樹が行われました。

来賓の加藤家を代表して加藤丈夫氏からは、「弘前大学に記念碑が建ち父も喜んでいることと思います」と謝辞が述べられました。

記念碑には、加藤氏が編集者を志す原点となった富田小学校の学級誌「なかよし」の文字と「子どもは国の宝だ。子どもたちを明るく健やかに育てる仕事に身を捧げたい」という終生揺らぐことがなかった加藤氏の信念が碑文として刻まれています。

「加藤謙一資料展」内覧会

「加藤謙一文庫」開設と記念碑建立を記念して「加藤謙一資料展」を創立50周年記念会館岩木ホールにおいて開催しました。資料展では、加藤氏に関わる資料15点、関係出版物120点、パネル48枚を展示し、同氏の業績と一生を紹介しました。

9月7日午後からのオープンを前に、「加藤謙一文庫」開設式と記念碑除幕式の出席者による内覧会を開催しました。内覧会では、長谷川館長の主催者あいさつに続いてフリーアナウンサーの奥村潮氏と加藤丈夫氏によるギャラリートークが行われ、展示資料の一点一点にまつわるエピソードが丈夫氏から披露され臨場感に満ちた内覧会となりました。



加藤謙一資料展にて
(右から遠藤学長、長谷川附属図書館長、
加藤丈夫氏、三村青森県知事)

おわりに

大正から昭和にかけての激動の中で、青雲の志を持ち弘前から上京。波瀾万丈の人生を乗り越え昭和の名編集長と謳われた偉人を支えたのは、家族の絆と「じょっぱり」精神ではないかと思えます。読者の皆様には、今回設置した文庫と記念碑からそれを感じ取っていただければ幸いです。

末筆ながら、本事業の実施に当たりご助言、ご協力いただきました学内外の多くの方々に対し厚くお礼申し上げます。

(学術情報課長 酒井量基)

「日露戦争と弘前第8師団」をテーマに 第7回学術講演会を開催

附属図書館主催の第7回学術講演会を10月16日、弘前大学創立50周年記念会館において開催しました。今年、本学のキャンパスの一部が旧陸軍弘前第八師団司令部の跡地であることから、日本近現代史・軍事史が専門の明治大学文学部の山田朗教授を講師に招き、『坂の上の雲』の時代一日露戦争と弘前第8師団と題し、同師団が日露戦争の勝利に果たした役割と明治という時代を、北の視点から多面的に解き明かすことをテーマとしました。

山田教授は、講演の中で英露対決という日露戦争時の世界情勢と日本軍の通信や、連携プレーが随所で功を奏し兵力に勝るロシア軍に勝利した経緯を専門の軍事史研究のデータを示し克明に解説されました。

また、秋山兄弟や陸羯南など司馬遼太郎の小説「坂の上の雲」の登場人物の興味深いエピソードにも触れ、参加者した市民、学生など約250人は熱心に耳を傾けていました。

(学術情報課長 酒井量基)



講演する明治大学教授
山田朗氏

「弘前大学学術情報リポジトリ」の 世界ランキング入りについて

本学の機関リポジトリ（弘前大学学術情報リポジトリ）が、スペイン高等科学研究院が作成する世界リポジトリ・ランキング(Ranking Web of World Repositories Top800)（2010年7月版）において、世界第342位（国内第25位）にランクインしました。

(世界リポジトリ・ランキング URL: http://repositories.webometrics.info/top800_rep.asp)



このランキングは、Google、Yahoo等からの検索可能なページ数、リポジトリへの外部リンク数、収録コンテンツファイル数、Google Scholarを検索した場合にヒットする論文および被引用数の4つの項目により順位を決定しています。1月と7月に定期的に公開され、弘前大学は2010年1月までのTop400ランキングではランキング外でした。

1位はCiteSeerX（コンピュータ・サイエンス分野の論文の検索エンジン/文献データベース）で、日

本の機関リポジトリでは、京都大学(38位)、九州大学(88位)、早稲田大学(98位)、名古屋大学(101位)、東京大学(113位)、東北大学(121位)など国内の56機関がランクインしています。

本学は、本文ありコンテンツ数のランキングでは国立大学42位ですが、「世界リポジトリ・ランキング」では25位と順位を上げています。これは、Google Scholarを検索した場合にヒットする論文および被引用数が評価されたものと考えられます。

「弘前大学学術情報リポジトリ」は日々コンテンツ数を増やしていますが、より充実させるためには教員の皆様のご協力が必要です。教育・研究成果を発表した際にはぜひ「弘前大学学術情報リポジトリ」に登録いただきますようお願いいたします。

(資料管理グループ係長 三上豊)

外国人留学生向け図書館ガイダンスを実施

9月29日に、外国人留学生を対象とした図書館ガイダンスを、国際交流センターと協力して行いました。このガイダンスは、外国人留学生に、図書館について知ってもらい、利用してもらおうと、平成22年4月に第1回を実施しました。

2回目となる今回のガイダンスには、10月入学の協定校からの交換留学生等11カ国38名が参加しました。使用言語ごとに3回に分けて行い、国際交流センター教員と外国人留学生に通訳をしてもらいました。マルチメディアコーナーや、留学生用コーナー等の館内案内と、本の貸出・返却の仕方等について50分程度説明しました。留学生は、本の借り方等について熱心に聞いていました。



ガイダンスに参加した留学生の皆さん

(情報サービス担当 佐藤綾希子)

知の宝！古本市～リユースブックフェア～

附属図書館では、第10回弘前大学総合文化祭の期間中(平成22年10月22日～24日)、附属図書館1階職員玄関前において、「知の宝！古本市～リユース・ブックフェア～」を開催しました。



掘り出し物を求めて集う来場者

この古本市は、重複や改版により不用となった図書館資料(廃棄済資料)の再利用と附属図書館の書庫内スペースの確保を目的に平成19年から弘前大学総合文化祭期間中に実施しているものです。

会場には、多くの学生や職員、一般市民が来場し、興味ある分野の資料を次々と持ち帰っていました。今回は、附属図書館第7回学術講演会で開催したプレリユース・ブックフェアを含めて約4,000冊の資料を新しい利用者に利用していただくこととなりました。

(資料管理グループ係長 三上豊)

本学関係者の著作で、図書館に寄贈された図書と資料の一覧

平成 22 年 4 月～平成 22 年 9 月受贈分

学部名	寄贈者名	資料名	発行所	発行年	数	所蔵先
人文学部	関根 達人	近世墓と人口史料による社会構造と人口変動に関する基礎的研究	弘前大学人文学部	2010	1	本館
	今井 正浩	科学思想史 = Essais d'histoire de la pensée scientifique	勁草書房	2010	1	本館
	山田 巖子	第二次世界大戦下のオウサマ信仰と民間巫者	弘前大学人文学部	2010	1	本館
	人文学部 言語文化研究 プロジェクト	言語とコミュニケーション：その文化と思想 1	弘前大学人文学部 言語文化研究プロジェクト	2008	2	本館
		言語とコミュニケーション：その文化と思想 2	弘前大学人文学部 言語文化研究プロジェクト	2010	2	本館
	人文学部 弘前城築城 400 年プロジェクト	全国の築城 400 年祭 築城 400 年を契機とする弘前市の歴史・文化・振興プロジェクト 2009 年度調査報告書	弘前大学人文学部	2010	1	本館
	人文学部附属 亀ヶ岡文化 研究センター	成田彦栄氏旧蔵図書目録	弘前大学人文学部 附属亀ヶ岡文化研究センター	2010	2	本館
佐藤節考古画譜 1		弘前大学人文学部 附属亀ヶ岡文化研究センター	2009	2	本館	
佐藤節考古画譜 2		弘前大学人文学部 附属亀ヶ岡文化研究センター	2010	2	本館	
教育学部	麓 信義	インサイドキック応用編	杏林書院	2010	1	本館
	J. N. ウェストヘン	1q84 Boek een ; Boek twee	Atlas	2010	1	本館
農学生命 科学部	青山 正和	土壌団粒：形成・崩壊のドラマと有機物利用	農山漁村文化協会	2010	2	本館
医学 研究科	今泉 忠淳	茶舗 50 景：写真集	水星舎	2010	2	本館 1 分館 1
	「弘前医学」編集委員会	Emerging Frontiers in Brain Research : crossroads of metabolic regulation, stress response and disease (弘前医学 Vol. 61 Suppl)	弘前大学出版会	2010	1	分館
保健学 研究科	保健学研究科 被ばく医療 検討委員会	弘前大学大学院保健学研究科緊急被ばく医療人材育成プロジェクト：活動成果報告書 平成 21 年度	弘前大学大学院 保健学研究科	2010	2	本館 1 分館 1
	弘前大学 大学院 保健学研究科	The 2009 Hirosaki University International symposium : the 1st International Symposium on radiation emergency medicine at Hirosaki University	弘前大学出版会	2010	1	分館
名誉教授	松木 明知	津軽語彙 覆刻版 全 20 冊	津軽書房	2010	1	本館
		日本麻酔科学史の新研究	克誠堂出版	2010	1	分館
		蘭医佐々木元俊その生涯と業績	津軽書房	2010	1	分館
	秋月 観暎	中國近世道教の形成：浄明道の基礎的研究	創文社	1978	1	本館
		中國近世道教の形成：浄明道の基礎研究	中國社會科學出版社	2005	1	本館
弘前大学白神自然観察園	白神学入門	弘前大学 白神自然観察園	2010	1	本館	
	白神自然観察園の植物 1 林床植物編	弘前大学 白神自然観察園	2010	2	本館	
	白神自然観察園の動物 1 概要編	弘前大学 白神自然観察園	2010	2	本館	
学務部	弘前大学 学務部入試課	世界に発信し、地域と共に創造する弘前大学	弘前大学 学務部入試課	2010	1	本館
弘前大学出版会	幻灯夢：弘前大学『言語力』大賞作品集	弘前大学出版会	2010	3	本館 2 分館 1	
	小学専門科学実験の手引き 2010 年度版	弘前大学出版会	2010	3	本館 2 分館 1	

学部名	寄贈者名	資料名	発行所	発行年	数	所蔵先
弘前大学出版会		新たな明日へ：弘前大学創立 60 周年記念 学生参加事業写真集	弘前大学出版会	2010	3	本館 2 分館 1
		グローバル下の北東北地域：地域経済・財 政・住民福祉の現状	弘前大学出版会	2010	3	本館 2 分館 1
		ハードウェア設計・演習：基礎からプロセ ッサ設計まで	弘前大学出版会	2010	3	本館 2 分館 1
		知能機械工学実験Ⅰ・Ⅱ 平成 22 年度	弘前大学出版会	2010	3	本館 2 分館 1
		知能機械工学実験Ⅲ・知能機械工学設計 平成 22 年度	弘前大学出版会	2010	3	本館 2 分館 1
		地域の環境と生活の実験・演習 2010 年度 版	弘前大学出版会	2010	3	本館 2 分館 1
		白神山地で活躍する人々 観光編	弘前大学出版会	2010	3	本館 2 分館 1
		サー・ウィリアム・オスラー讃歌：サー・ ウィリアム・オスラー展図録	弘前大学出版会	2010	3	本館 2 分館 1
		ノーベル医学・生理学賞に見る現代西洋医 学の系譜：弘前大学医学部分館展示室完 成記念特別展図録	弘前大学出版会	2010	3	本館 2 分館 1
		国立大学法人弘前大学 知的財産取扱いの 手引き	弘前大学出版会	2010	3	本館 2 分館 1
		ルート君と数楽散歩	弘前大学出版会	2010	3	本館 2 分館 1
		地方公企業の経営改革：自己経営評価と 経営分析をとおして	弘前大学出版会	2010	3	本館 2 分館 1
		The 2009 Hirosaki University International symposium：the 1st International Symposium on radiation emergency medicine at Hirosaki University	弘前大学出版会	2010	3	本館 2 分館 1
		基礎物理学実験の手引き平成 22・23 年度版	弘前大学出版会	2010	1	分館
		東北発！地域に根ざした技術家庭科の授業	弘前大学出版会	2010	1	分館
	成田彦栄氏考古・アイヌ民族資料目録	弘前大学出版会	2010	1	分館	
弘前大学生協同組合		弘前大学卒業記念アルバム 平成 21 年度	弘前大学卒業アルバ ム編集委員会	2010	1	本館



弘前大学附属図書館報「豊泉」第 3 2 号

発行日：平成 2 2 年 1 1 月 3 0 日

編集／弘前大学附属図書館広報委員会

発行／弘前大学附属図書館 〒036-8560 青森県弘前市文京町 1

TEL 0172(39)3162 FAX 0172(39)3171 URL <http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/>

標題の「豊泉」は、明治 9 年の「仏国学制」付録上巻中の「人智ヲ広ムルノ豊泉アリ」の文に基づき、
松原邦明名誉教授命名 題字：藤原楚水編「書道六體大字典」（三省堂）より